

祖母のアイノカタチ

新市中央中学校二年

かしはら

優月

かしはら

ゆづき

私はごはんが大好きです。ツヤツヤ光っているお米も、湯気が上がっているおみそ汁も成長期の私の食欲を満たしてくれます。特に朝ご飯に食べる祖母のおみそ汁は、私の自慢です。椎茸、昆布のだし汁に、大根、にんじん、豆腐、玉ねぎ、ナス、モロヘイヤ、モロツコと旬の食材がたっぷり入っています。

私が小学二年生の頃の話です。今でも祖母は毎日野菜たっぷりのおみそ汁を作ってくれます。一日は朝の食事から。朝から野菜や昆布の栄養を十分に採ることができるとのおみそ汁は今でも私の宝物です。しかし当時小学二年生だった私はオシヤレじゃないとも思っていたのか、お汁わんにっいであったおみそ汁を四日間残し続けました。五日目、ついに祖母の堪忍袋の緒が切れたのか、おみそ汁が私と双子の妹だけ置かれていませんか。そして、すると祖母が、

「おばあちゃん、おみそ汁が飲めんのんだ。たらっいでやらんわ！人が作ってあげとるのに飲まんとはどういうことな！もう謝ってきても許さんけえな。」

とそれまで聞いたことのない、トゲトゲした声で私たちをしかつたのです。私はびっくりしてその場から逃げ出そうと試みましたが失敗。次は父からでした。父は、「おばあちゃん、おみそ汁作ってくれと思ってるん。こんなにおいしいお汁を毎日食べれるのはうちだけで！おばあちゃんに謝りなさい。」

とさらにしかられました。急にしかられた私は、学校から帰宅しても祖母とは口をきかず、私は悪くないとへそを曲げていました。

その日の夜、父・祖母から朝の話を聞いた母は、カニカニに怒り始め、私と妹の二人は部屋に呼び出されました。その時言われた祖母は私たちのために作っているということ

今でも忘れません。小学二年生だ。た私は
 自分のことばかりで考えが甘く、ごはんを作
 りている側の気持ちを考えることができてい
 ながったのです。祖母は毎朝、私たち家族へ
 の愛をおみそ汁で伝えてくれたのだと気
 付き、祖母へのもうしわけなさと、祖母から
 の思いがうれしく、泣きながら謝ったことを
 覚えていきます。
 私たちが食べているごはんは必ず愛情がこ
 められて作られたごはんです。何十人もの人
 の努力があった。私たちはごはんを食べるこ
 とができません。だから残すなんてもったいな
 いと思います。私は日頃、ご飯茶わんにはお
 米粒は残さない。いたたきます。とごち
 そうさま。をきちんと言おう。そして給食では
 時間いっぱい食べて食缶のごはんを残さない
 ようにする。ことの三つを心がけています。幼
 い頃、夢中になつた本の中に、
 いばあさんという本があります。その絵本
 では、お皿の上の食べ残しを見たおばあさん

が「もったいない」と言いながらやってき
 て食べ残しを全て食べてしまおうおばあさんの
 話です。おばあさんは他にも野菜がきらいだ
 からと残す女の子に「もったいない」と言
 います。私も同感です。好き嫌いがあるのは
 仕方がないけど、少しだけでも食べてみたり
 友達にあげたりすることはできないでしょう
 か？お茶わんについているお米の食べ残しも
 一人一人の意識で変わると思っています。

祖母が作るおみそ汁のようには、ごはんを作
 ってくれる人は、愛情をこめて作ってくれて
 いると思えます。だから食べる側の私は、こ
 れからも残さないようにすることと、「いた
 だきます」と「ごちそうさま」の挨拶を言う
 ことで作ってくれた人と食べ物に対する感謝
 を伝えていきたいです。